

Not-God

『アルコールイクス・アノニマスの歴史』

Ernest Kurtz (アーネスト・カーツ)

第二章 最初の成長

1935年6月-1937年11月

酒をやめたアルコールイクの限界

Presented by
なかやま ひいらぎ

1

はじめに

第二章の構成

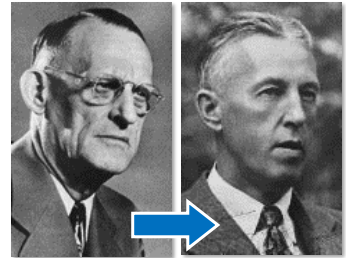
1. アクロンでの最初の数ヶ月・霊性の由来
2. ニューヨークにおけるオックスフォードグループとの分離・受けた影響
3. アクロンでの展開
4. 最初の成功の認識

2

さらに他のアルコールクヘ

Not-God79

- 神ではないから、他者が必要になる
- ドクター・ボブから「ほかのアルコールクに働きかけよう」と提案
翌6月11日とされているが、6月26日



- ドクター・ボブがアクロン市立病院に電話した
- 「ニューヨークから来た、アルコールリズムの新しい治療法を見つけた人に会ったんだ」

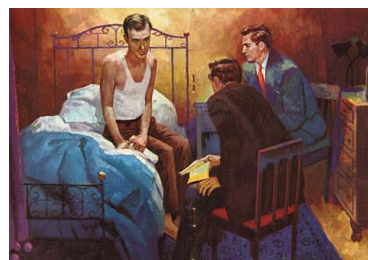
1935年6月26日 — AA 227-228, AACA 108

3

第三の男 ビル・D (1)

Not-God80

- 弁護士で、元市議会議員、助祭を務めたこともあった
- だが彼はアルコールクであり、6か月で8回入院



The Man on the Bed, by Robert M. Bill Dotson, -1954

- ビルたちは、彼の目を「絶望」と「底」に向けさせるのは難しくないと、思った
- 「これまで私に話してくれた人は私を助けようとしていた」

1935年6月28日 — AA 228-230, AACA 108-109

4

第三の男 ビル・D (2)

Not-God82

- ビル・Dはすぐに自分がアルコールクであることを認めた
- しかし彼は、霊的なアプローチや神という概念に抵抗した
「私はまだ神を信じているが、神は私をもう信じていないだろう」
- 二人は翌日再訪し、さらに何度か訪問した。数日後、彼は前の晩にどのようにして「希望の光」が訪れたかを話した
-
- ドクター・ボブのことが**まぐれでなかった**ことが証明された
- オックスフォード・グループに馴染んでいる必要は無い

1935年6月28日～ — AA 228-231, AACA 108-109

5

ドクター・ボブの家に滞在

Not-God83

- ビル・Wは、1935年の夏一杯、**ボブの家に滞在**
毎週オックスフォードグループのミーティング
-
- ほぼ毎日**ヘンリエッタ・セイバーリング**が訪問
- **アン**が長年習慣にしてきた毎朝の「静かな時間」
- アンの聖書の朗読にはお気に入りの箇所があった
 - パウロの「コリント人への手紙」の愛についての節（コリント113:4-8）
 - ヤコブによる「信仰の意味とはその『働き(work)』にある」
- 1935年の夏は、**彼女たちが「霊性を吹き入れてくれた」**時期だった



6

ウィリアムズ夫妻のミーティング

Not-God 84

- アルコホーリックに対する彼らの働きかけはなかなかうまくいかなかった
- ドクター・ボブの家に連れてくると
トラブル → 周囲の家に歓迎されない
- **ウィリアムズ夫妻** (T・ヘンリーとクラレス)
彼らの邸宅で行っていた水曜日のオックスフォード・グループのミーティングにアルコホーリックなら誰でも参加可に



1935年夏 — AACA 113-114, 215

7

最初のAAミーティングの母体

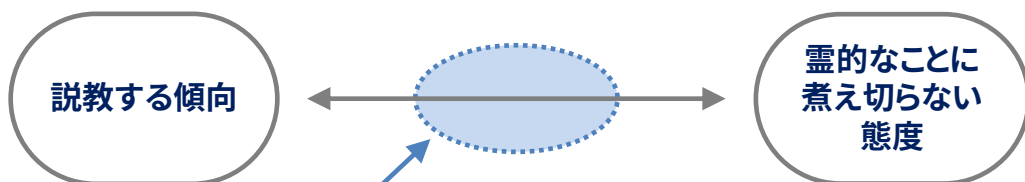
It did not work easily

Not-God 84

- ビル・W、ボブ・S、ビル・Dの3人で行き詰まってしまった
- 後にビル・Wは当時を振り返り、両極端のうち前者に傾いた

(宗教的な要素を**強調しすぎる**傾向)

(宗教的な要素に**否定的な**態度)



- **幸福で実り多い中庸な地点**は、長い努力の末にしかたどりつけない

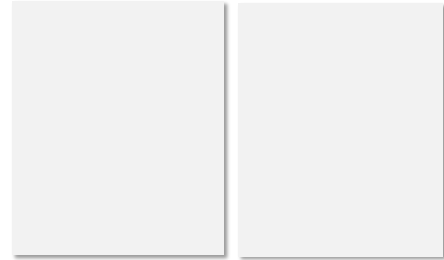
1935年夏

8

ロイスの訪問

Not-God 85

- 7月中旬、ロイスがボブの家を訪問
- 飲まない生活を子どものようにうれしがる夫に喜び、ロイスはビルの努力と熱中を大いに歓迎した



Lois Wilson, 1891-1988 Anne Smith, 1881-1949

- 彼女の心にはようやく新婚のときの愛と、夫の能力への深い信頼がよみがえった
- 彼女はブルックリンのクリントン通りに戻り、あらゆる協力を惜しまないと決心した

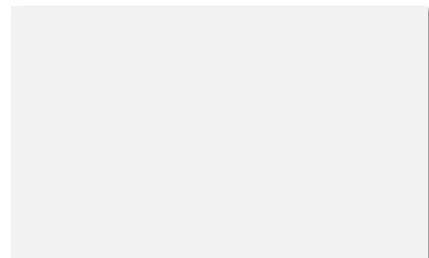
1935年7月中旬

9

失敗してニューヨークへ帰る

Not-God 86

- 9月初旬、代理権争いにまたも敗れ、ビルはニューヨークに向かった
- ウォール街への復帰と、酒飲みたちへの働きかけの**両方に失敗**した
 - 4人、成功率は5%以下



アクロン駅を描いた絵はがき

- アクロン駅のプラットフォームでの別れの時
ビル: 「自分がニューヨークに戻ってもこれが続けられるだろうか」
ボブ: 「ビル、シンプルにしよう」 Keep it simple

1935年9月初旬

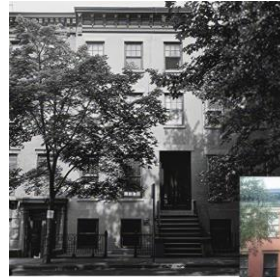
10

自宅を開放してみるが成果なし

Not-God 87-88

- アンがボブに対して示した家庭的な愛情をアルコールクに与える

- アルコールクは「愛されていない」と感じている（ラブリーではないから）



182 Clinton Street

- カルバリー伝道所からさまざまなアルコールクを連れてきて看護してみたが、結果はゼロだった

「アルコールクたちを過度に私たちに依存させれば、彼らは酔い続けてしまう」

→ 毎週火曜日晚のミーティングだけに縮小

1935年後半～ — AACA 111-112

11

タウンズ病院の患者たち

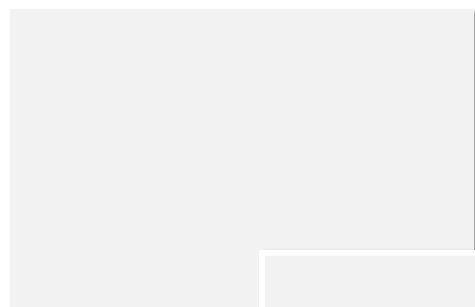
Not-God 87-88

- タウンズ病院から患者をオックスフォードグループのミーティングに連れていくようになった

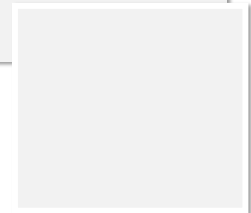
- シルクワース博士は医師としての評判とキャリアをかけて、病院でビルが活動することを許した

- さっそく二人を回復させた

- ハンク・Pとフィッツ・M



カルバリーハウスと教会



サム・シューメーカーのミーティング

1935年後半

12

自分たちだけで集まる方を好む

Not-God 86

- ハンクやフィッツその他のアルコールは、オックスフォード・グループあるいはカルバリー教会の直接の管轄下にある集まりよりも、ビルの自宅で火曜日に開かれる**アルコールだけの集まりを重視**していた
- ビル自身もオックスフォード・グループへの出席を控えるようになった。



クリントン通りの家のリビングルーム

1936年

13

目的の違い

Not-God 89

- オックスフォード・グループの目的 **世界の回心**
 - 手段として「社会的な著名人を回心させる」
 - アルコホーリクたちの関心は**アルコールだけ**に向いていた
- カルバリー教会のオックスフォード・グループ
 - 経験を話す——分かち合い (sharing) ・罪の告白 (confession)
 - 信仰を証す (witness)
- アルコホーリクたちは経験を話すことを好んだが、それは神による**福音** (good news) ではなく、彼らの**見解** (view) だった



「集団指導」の導入

1936年

14

集団指導への反発、そして分離

Not-God90

- アルコホーリクたちはこの変化に神経をすり減らした
 - OGのメンバーはアルコホーリクたちの異議申立を拒否した
- **サム・シューメイカー**は、ビルが逆境や失敗の意味、祈り、神の無限の善などを理解するのを助けた（さらに学びたい）
 - アルコホリズムが身体的・精神的・霊的な**三重の病気**であることの気づき
- 1937年晩春、シューメイカーの休暇中
 - 伝道所の人たちの火曜日のミーティングへの出席を禁止
- **ビル・Wの決断**: 霊的側面はまだ学ぶ必要があるが、OGは不要

オックスフォード・グループからの分離

1937年晩春 — AACA 112-113

15

1955年のビルの講演から

Not-God92

- OGの人たちは、私たちに**何をすべきか**をはっきり示してくれた——そして、アルコホーリクには**何をしてはいけない**も
 - アルコホーリクは酒以外からの圧力は一切受け入れない
 - アルコホーリクは（後ろから押すのではなく）**常に導かれねばならない**——押しの強い伝道活動や、集団指導のやり方には馴染めない
 - **急がば回れ** アルコホーリクは最初はず酒をやめることしか望まない
 - 霊性は、バケツで与えるのではなく、**ティースプーンで一さじずつ**与えてやらなくてはならない
 - 「『絶対』なんかくそくらえだ！ 俺は今日一日飲まないでいただけなんだ」

— AACA 112-113

16

OGのAAへの影響(カーツの考察)①

Not-God95

オックスフォード・グループのAAへの貢献は二つある

- **ポジティブな(肯定された)もの**
 - 直接的なものと間接的なものがある
 - 雰囲気 tone、かたち style=方法に表れる
 - 特定の実践
- **ネガティブな(否定された)もの**

17

OGのAAへの影響(カーツの考察)②

Not-God96

1. **くだけた雰囲気(informal)**
 - ハウスパーティや応接室での会話—少人数での親密な雰囲気での交流
 - その雰囲気が、宗教とは喜び joy であり、心地良い交わり fellowship であると伝えていた
2. **特定の神学的立場に立たない**
 - OGはメンバーに属する教会を離れるように要求しなかった
3. **「段階 stages」を経ながら、「変化した人生 changed life」を達成する**
 - AAにとっては重要な意味を持った—ソブラエティは単に酒を飲まないだけでなく、それ以上のなにかであるという理解を提供した
 - この言葉によって、**回心 conversion** という宗教用語の使用を避けた

AAがオックスフォード・グループから受け取った実践 (practice) にも上記三つが含まれていた

18

OGのAAへの影響(カーツの考察)③

Not-God96

4. 五つのC (信頼・告白・確信・回心・継続) よりも、 五つの手順のほうがプログラムに貢献した

1. 神に降伏する to give in to God
2. 神の意志を知る to listen to God's directions
3. 導きをチェックする to check guidance
4. 償い restitution
5. 分かち合い sharing

証言(信仰告白)としての分かち合い・罪を告白する分かち合い

19

OGのAAへの影響(カーツの考察)④

Not-God96

5. その他の実践

- 「変化した人生」を達成するために他者の支援を無償で行う
- 人生を変えるために他の人に個人的に関わることへの責任の強調

6. あまり自覚されていない影響

- オックスフォード・グループ創始者ブックマンの持っていた背景
 - ブックマンが保守的なルター派敬虔主義の家庭で育ったこと
 - 福音主義によって回心のプロセスへの生涯にわたる関心
 - ドワイト・ムーディーのような伝道者になりたい

20

OGのAAへの影響(カーツの考察)⑤

Not-God97

間接的な影響

a. 六つの前提

- ① 人間は罪人である
- ② 人は変わることができる
- ③ 告白は変化の必須条件である
- ④ 変えられた魂は神と直接、交流することができる
- ⑤ 奇跡の時代が再来した
- ⑥ 「変えられた」人はほかの人を「変え」なくてはならない

21

OGのAAへの影響(カーツの考察)⑥

Not-God97

b. さらに間接的・無意識的な影響として

- 知性(≒理性・努力)の評価を低くすること(神によって救われる)
- 本をではなく人を学べ(「人に学べ」ではない)
- 議論に勝てば、人を失う(多元主義)
- あなたの意見 view ではなく、福音 good news を与えよ
- ほかの人と同じ葛藤や問題に悩まされているという発見
- 挑戦的な達成を増やすことよりも、目標を下げることをむしろ受け入れるべきだ(パワー幻想への対処)

22

OGのAAへの影響(カーツの考察)⑦

Not-God98

● ネガティブな(否定された)もの

- ① 「イエスに救われる」 原始キリスト教の根本的教理
→ 「**何か**に救われる」 (イエス・キリストは完全に省かれた)
- ② 最初のメッセージも「救い」 → 「**絶望的な無力**」
- ③ 「**四つの絶対**」 (絶対正直・絶対純粋・絶対無私・絶対愛)
 - 正直・純粋・無私・愛は実践されたが、絶対性は否定された
 - 絶対性は、多くの人を遠ざけ、一時的に熱狂しても後につぶれてしまう
 - 絶対という目的をはっきり否定したことは、どのような肯定的な継承より重要であった

— AACAA 112
23

OGのAAへの影響(カーツの考察)⑧

Not-God99

- ④ 社会への積極的伝道
 - オックスフォードグループの成功には不可欠だったかもしれない
 - まだ仕事のある者はアルコールリズムを公表されることを恐れた
 - 知名度を得ることでプライドが再膨張して再飲酒してしまうと、プログラムへの信頼性を傷つけてしまう
- **匿名性(アノニミティ)の採用**
- 公共の場で多くを語るアルコールリクは増長して飲んでしまいがち
それによるAAへの信用を落としかねないリスクを避けた
 - オックスフォード・グループのあり方を逆にして引き継いだ

24

一方、アクロンでは・・・

Not-God102

アクロンで最も裕福な家庭の一員であった**ボブ・E**という人物の語り

- ポール・Sという先に酒をやめていた知り合いを通じて、**ドクター・ボブ**と知り合った 勧められて入院
- 入院中の5日間は、毎日2～3人の男たちが訪問してきた
 - 彼らは、以前は飲んでいて、いまは飲んでいないという話を繰り返した
- 4日目になると、男たちはボブ・Eの話に耳を傾けるようになった

Akron, Ohio 1930s

1937年2月

25

ボブ・Eの降伏

Not-God102

- 5日目に男たちは「**霊的な側面**」を強調した
- 退院する直前にボブ・Eが行ったこと——**降伏**した
 - ベッドサイドにひざまずき、ドクター・ボブが傍らに立って言った
「もう一人の人と、すべてを分かち合いなさい
大きな声で、祈りと分かち合いをしなさい
降伏をすませなければ、ミーティングには出られない」
- 「(プログラムを) **手にするか、置いていくか**」
——「やるのか、やらないのか」



アクロンから派生したグループの厳格さ

1937年2月

26

メンバーたちの活動

Not-God 103,106

- 多くのメンバーは仕事がなかった。
ばらばらに、それぞれの家を訪問しては集まった。
- また彼らはアン・スミスに会うためにたびたび立ち寄った
 - どのような問題が持ち込まれても彼女は直接答えず、聖書の中の相応しい箇所を見つけて読んで聞かせた
- 公式のミーティングはウィリアムズ夫妻の家、毎週水曜日
 - 1937年の終わりにはアルコールが半分を占めていた
 - クリーブランドから数人が通うようになっていた

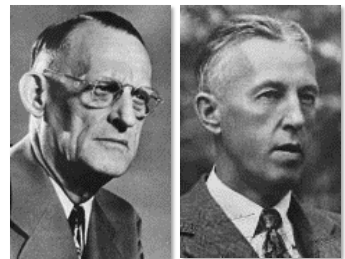
オックスフォードグループのアルコール部

1937年
27

最初の成功の認識

Not-God 106-107

- 1937年11月に、ビル・Wがアクロンへ
ニューヨークでのOGとの分離のニュース
- ドクター・ボブの家の居間
 - ほとんどの人は、酒をやめたりしなかったし、彼らの考えに関心を示したりしなかったが、驚くべき成功もいくつかあった—40人以上
- 『何か新しいものが世界に出現した』
→ 問題は、この経験をどのように伝えればよいのか？



1937年11月 — ACAA 115-117
28

三つの路線

Not-God108

- ビルとボブ、アクロンのメンバーたちで議論されたこと
 - ① 有給の「伝道者」を雇って全米を巡らせる
 - ② アルコリズムを治療する病院を全国展開する
 - ③ プログラムを曲解と歪曲から守るために活字にする
- すべてを拒否する人たちが多かった
(プログラムは対面で人から人へ渡されるべき)
- 最終的にはウィルソンが説得し、投票の結果、僅差で三つのアイデアすべてが採用された

1937年11月 — ACAA 219-222

29

道半ば (1)

Not-God109

- 人間が神ではないということに深い意味があるという認識は、明らかにまだ浸透していなかった
 - 飲まない喜びを味わっていても、自分はけっして神ではないと認めるためには、より深い信仰、より深い洞察が必要であった
 - 自らの限界は、全体性を意識することから生じる
(無限の神を意識することで、自分の矮小さを意識するようになる)
 - その有限性・不完全性は、否定的なものではなく、むしろ肯定的なものである
 - 弱さに根ざしたなかから強さを見つけることができる

30

道半ば (2)

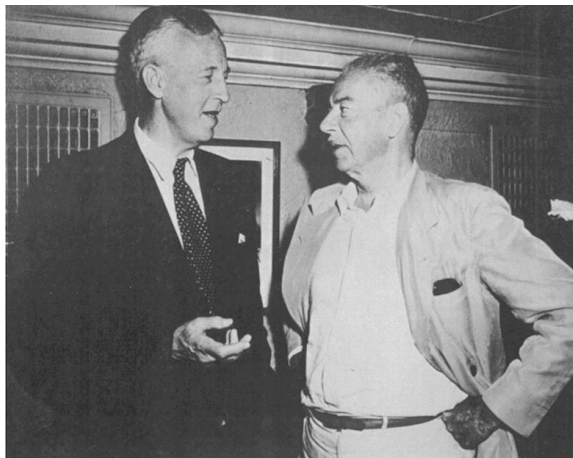
Not-God109

- しかし、このことはその後の二年間に大いに役に立った。
 - 飲んでいるアルコールの気分の浮き沈みが平安をかき乱すように、しらふの生活の中での気分の浮き沈みも同じぐらい平安をかき乱した
- 「神ではない」ことを受け入れるためには、**アルコール以上のなにか**が必要だった
the acceptance of being "not-God" had to do with more than alcohol.

次回は第三章「AAの独立」

31

ご静聴、ありがとうございました。



SEP-19-2023

from *Back to Basics* – AA Beginners Meeting

32